

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は月に一度のスタッフ会議の冒頭で読み合わせをし、再確認をしている。仕事に追われると実践につながらない場合もある。	法人の運営方針に基づきホーム独自の理念と6項目の指針が作成されている。スタッフルームの入口等に誰にでもわかりやすく掲げられており、月1回のスタッフ会議で読合わせをし、常に立ち戻る考え方として支援に活かしている。理念や指針にそぐわない言動などが職員に見られた時には管理者が個別に関わり助言をしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍前は、利用者様と買物に出掛けたり、隣接施設の庭へ散歩したりしていた。ご近所の方が土手の草刈りをしてくれて大変感謝している。	自治会に加入し会費を納めている。ホーム周辺は坂道のため職員が地域の方と雪かきをしたり、ホーム土手の草刈りを地域の方にお願いしたりして協力し合っている。散歩などで外に出た時には地域の方と挨拶を交わしている。現状、新型コロナ禍のためにボランティア受け入れや地域の行事への参加は控えているが、例年であれば多くの人々とふれあう機会が設けられている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方々から相談があれば支援方法を伝えることはできるが、当方から活かすことはできていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍前は施設に集合し、現在は書面開催にて運営推進委員のご意見・感想・要望を聞き、スタッフ会議にて共有し、改善につなげている。	例年であれば定期的な開催を予定し実施しているが、今年度は資料を送付しての書面開催となっている。メンバーは利用者代表、家族代表、町内会長、民生委員、広域連合介護保険課職員、法人内の他事業所職員、ホーム職員で構成されている。資料に基づきメンバーから寄せられた意見をまとめて報告したり、スタッフ会議でも会議の議題に上げてサービス向上につなげている。地元消防団員の参加依頼についても検討をしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	必要に応じて連絡を取り合い協力している。	事故報告を始めとして必要時にその都度連絡を取ったり、新規利用者の入居時には情報交換を含めて話し合いをしている。介護認定更新時の面接はホームで行い職員も立ち会っている。広域連合からの介護相談員については新型コロナ禍等のため中止となっているが、機会を見て再開する予定である。	

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	スタッフ会議や研修等で学んでいる。施設外の道路状況が悪いので玄関は施錠しているが、ご家族様の同意を得て行っている。	ホーム建物が急坂に位置しており、危険防止のために家族の同意を得て玄関は施錠されている。拘束を必要とする方はいないが、外出傾向の強い方には近くの境内や希望される所へ職員と一緒に散歩に出かけ気分転換をしている。身体拘束防止に関してスタッフ会議で話し合い、実際のケアについてアンケートで見直している。ホームの構造上、居室が1階と2階に分かれており安全確保のために夜間のみドアコールを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束委員会を開催し確認している。スタッフ会議では虐待に関するアンケートを取ったりし、防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	必要とする事例がないので学べていない。機会を見て研修に参加したい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約または改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	主に管理者・ケアマネが行っている。時間をかけ同意を得ながら説明している。改定等の際は家族様に文書を送り、分からないことがあればいつでも応えられるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に目安箱を置いたり、面会時に意見を聞いたりしている。運営推進会議や外部評価での利用者様、家族様の意見要望を受け、改善に向けている。	殆どの方は意見を伝えられるが、時には職員が利用者の表情やしぐさから汲み取り対応している。新型コロナ禍前は家族の来訪も多く、週2～3回から遠方の家族でも月1回ほどはあった。来訪時には直接意見を聞いて運営に反映させていたが、現在は月1回発行のさくら新聞で日常生活を写真入りで伝え、担当職員からもひと言添えて様子をお知らせしている。家族会はないが、年2回のお楽しみ行事(お花見、クリスマス会)には全家族が集い交流を深め、意見・要望などを聴く機会となっている。頂いた意見はスタッフ会議で話し合い運営に反映している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	年2回個人面談を行っている。すべての意見、提案に応えられる訳ではないが、スタッフ会議等で共有したり、上部に上げたりしている。	月1回第2火曜日、19時からスタッフ会議を開催している。欠席はほとんどなく当日の勤務者も出席し、時には利用者も一緒に参加している。勉強会や提案事項の話し合い等、全員が意見を出して支援の向上に役立っている。「気づきノート」をスタッフルームに置き、いつでも気づいたことを記入し気軽に意見・情報などを出せるようにしている。年2回、管理者との個人面談があり意見、提案を聞く機会となっている。	

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準は高いとは言えないが、個々の体調や家庭環境等によって面談等で要望を聞いてもらい、長期間働けるよう配慮してもらっている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の力量に応じた対応をしている。義務づけられている研修は受けるよう機会を確保している。法人外の研修は、必要と思うが、人手不足もありなかなか行かない。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流機会は作っていないと思う。施設内だけで済ませず他施設者と交流機会や研修、勉強会は必要だと思う。またその時は参加したい。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	家族様からの情報も組み入れつつ、利用者様にしっかり話を聞くように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	主としてキーパーソンとの関係づくりとなるが、見学時や電話等で家族様の話をしっかり聞くよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人も含め、家族様、入所前の施設等からも情報をいただき、その情報をふまえて、現在の状況に合わせて必要な支援ができるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者様の身体状況を見て、できることはお願いしている。共に過ごし支え合うのが理想だが、忙しい時は職員都合になってしまう。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族様、利用者様双方の要望を聞き、応えられるよう努めている。外泊や電話での会話など要望があれば対応している。		

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	希望があれば連れ出したり面会してもらったりしている。	利用者の馴染みの場所や知人などとの関係を大切にし関係が継続できるように努めているが、現在は自粛せざるを得ない状況となっている。ドライブに出かけた時は車窓から自宅近くの馴染みの風景を楽しんでいただいている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う合わないはあるが、お互いに楽しめるよう会話したり、歌を歌ったりしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	主に家族様とになるが、必要に応じて経過を聞いたり、異動後の施設職員に情報を聞いたりしている。終了後は、家族様から相談があれば応じるが、特に例はない。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	なるべく利用者様との会話の中で汲み取るよう努め、困難な場合はスタッフ会議等で検討する。	殆どの利用者は思いを表出することができる。困難な時は会話や家族からの情報に基づいて意向を汲み取ったり、スタッフ会議で検討して把握に努め、できるだけ沿えるようにしている。利用者に対しては無理強いせず、また、複数の選択肢から選べるように働きかけ、根気よく会話を深めることで思いを引き出すようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	利用者様との会話や家族様との面談時等、入所前の施設からの情報等から把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	なかなか難しいが、日々の生活の中で利用者様その人のできることをやっていただきながら会話や様子の中で把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護日誌やスタッフ会議での意見、利用者様との会話、家族様との連絡の中で、利用者様のできることを中心にした計画を作成するようにしている。	職員は1~2名の利用者を担当している。介護計画の見直しは6ヶ月に1回とし、全員参加のスタッフ会議でモニタリングや検討を行い、計画作成担当者が作成している。家族の意向は電話にて聴き、計画に反映している。状態に変化が見られた時はその都度見直しを行い、現状に合った支援につなげている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録は職員の出勤時に必ず読むようにしている。具体的に記録するよう努めているが大雑把になっている時もある。		

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者様や家族様のその時の状況により柔軟に対応できるよう努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍前は傾聴ボランティアの方や行事ボランティアの方々に来ていただいていた。歯科と理美容院は訪問で来ていただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者様、家族様のご希望があれば協力医療機関以外でも受け入れている。月1回の定期往診の他に、体調不良時はいつでも対応していただけるようになっている。	利用者や家族の希望により、現在は利用者全員が協力医による月1回の訪問診療を受けている。歯科については往診可能な歯科医師に依頼して連携をとっている。訪問看護も含めて法人系列の病院の訪問診療科が担当してくれており、必要な体制が組まれている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	状態が変化した場合はすぐに報告し、対応していただいている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時は家族様、病院、事業所と情報を密にしカンファレンスにも同席している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族様の希望があればターミナルケアを行っている。施設側、職員事情も説明し、できる限りの支援を行えるように対応している。	ホーム利用契約時に終末に関する説明と確認を行っている。状態の変化に合わせて本人・家族の希望を受け「看取りケア指針」により対応を検討し、「看取り同意書」を交わしている。ケアマネージャーが看護師の資格を持っているので職員も心強く、チームとしてできる限りの支援に取り組んでいる。法人の系列病院訪問診療科のバックアップ体制がしっかりとしており、それに支えられている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会で急変、異状時の対応を学んだり、応急手当の手順を貼り出し事故発生に備えている。		

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、避難訓練を実施している。特に夜間想定を多めにしている。隣接の特養(町)と協定を結んでいる。	年2回防災訓練を実施している。本年は火災を想定して消防署への通報訓練と避難訓練を実施した。利用者は玄関まで避難し、職員もマニュアル通りに実施できたという。地域の方には連絡はしていないが、隣接する高齢者福祉施設との防災協定が結ばれており協力体制が組まれている。水、食料品などの備蓄も3日分確保されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の先輩として、丁寧な声かけをしたり、排泄介助時は戸や窓を閉める等心掛けています。が、慣れ言葉になったりきつい言葉になってしまうこともある。	名前は苗字に「さん」付けでお呼びし、人生の先輩としての誇りを傷つけない声かけや対応を心掛けている。スタッフ会議で学習係が中心となり尊厳に関する勉強会を行っている。また、異性介助を拒まれる方には同性介助を心掛け、プライバシーを損ねないようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	表出できる利用者様はどうしたいかを問うことができるが、難しい利用者様については職員が決定してしまうこともある。また大勢の中で表出が難しい利用者様については場所を移動して聞いてみたりしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できる限り利用者様一人一人のペースに合わせて、共同生活であり、職員都合になってしまうこともある。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者様の入所前の生活時の服装も大切に、家族様に衣類を用意していただいたり、季節に合った身だしなみになるよう努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	今日何を食べたいのか利用者様に聞いたり、誕生日に食べたい物をリクエストしてもらっている。盛り付けや配膳、食器拭き、片付け等をやっていただいている。	自力で食事が摂れる方と何らかの介助が必要な方はほぼ半数ずつで、食形態は刻み、トロミ、ミキサー食の方が半数いる。献立はその日の担当者が利用者とは相談しながら食材を見て決めている。利用者は味見、盛付、食器拭きなどのお手伝いをしている。誕生日や行事の特別メニューは希望に沿い、手作りのクレープ等を楽しんでいる。平常時は外食ツアーが好評で、楽しめる企画を立て、特に寿司屋が人気であるという。家族からの野菜・果物の差し入れも多く、食卓を賑わせている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者様の食べる力等を考え、量や形状を調節したり、肉や魚、野菜などバランスよく摂れるよう工夫している。水分はしっかり摂る様支援している。		

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	一人でできる利用者様は歯磨きしていただき、難しい利用者様は職員が行う。たまにひどく拒否することがありできない時もある。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者様一人ひとりの力にあった排泄介助ができていると思う。なるべくトイレでの排泄となるよう声かけ誘導している。	全介助と自立の方が若干名で、あとの方は一部介助や見守りが必要となっている。排泄チェック表を活用しパターンを把握して利用者に合わせて介助を行っている。排泄用品の検討やさり気ない声がけをし、トイレで排泄するようにしている。トイレには大きく「便所」と表示されわかり易くなっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便記録をつけている。朝食にヤクルトを飲んでいただくようにした。なるべく自然排便としたいが、利用者様の身体状況により薬も使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日や時間帯は職員都合で決めてしまっている。入浴希望か否かは確認するが、入浴順や時間はなるべく希望にそえるよう努めている。	週2回は入浴している。全介助の方が半数以上で職員二人で介助する方も若干名いる。家庭浴槽で、職員が介助するのは余裕がない造りのため、湯船に浸っていただくのに工夫が必要となっている。入浴を拒む方は現在なく、ゆず湯など季節を感じながら入浴が楽しめるように支援している。脱衣所は物品が整理整頓され、使い易くなっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室の温湿度は配慮し、前夜の睡眠状態等に応じて休んでいただけるよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の用法、用量等、職員の目の届くところに置いてあり、変更があれば会議や日誌で申し送る。服薬確認は2人で行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	介護度に関きがあるので、利用者様全員が同じ事をするのに難しい時もある。毎月の行事担当が季節の行事を計画し、気分転換になるような楽しみごとを模索している。		

グループホームさくら

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍前は、利用者様、家族様のご希望があれば外出してもらったり、施設で外食ツアーに出たりしていた。今は外出できない為、テイクアウトで対応している。	新型コロナ禍で行事外出は控えているが、日常的には隣接施設の庭などへの散歩に出かけている。外出時、半数以上の方が車いすを使用し、自力で歩行できる方は若干名で、あとの方は杖や歩行器を使用している。例年、外食ツアーが好評だがコロナ禍ということで代わりにテイクアウトで楽しんでいる。室内でできる身体を動かすゲーム(風船バレー、ボーリング)やラジオ体操を取り入れ気分転換を図っている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	利用者様の希望があれば持っていただく事もあるが現在は希望者はいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご希望があれば電話していただいたり、家族様、親類の方から求められた時はお話していただくよう支援している。お手紙は家族様から届いたものはお渡ししているが、利用者様からの希望はない。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	県の職員寮を改築した施設の為、居心地が良いとは言いがたい。が、温度調節など、不快にならないよう配慮している。	既存の建物を改築しているのでコンパクトな造りとなっており、居間、食堂、台所が一体化している。窓は大きく、採光や眺めも良い。街並みや諏訪湖まで眺望でき、利用者にとって馴染みの景色が安心へとつながっている。調理の匂いも漂い家庭的な雰囲気がある。ホール内の柱を上手に活用し仕切りにしたり、その月のポスターや歌詞なども貼られ、職員の創意工夫により居心地の良い場所が作られている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居室は個室なので独りになれるが、ホール(共用空間)は狭く、居場所作りができないのが難。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者様が使い慣れた物を持ち込めるようにしている。	居室は十分な広さがあり、ベッド、収納庫、洗面台が備え付けられている。自宅からの馴染みのタンスやハンガーラック等が持ち込まれて使いやすく配置されている。タンスの上には職員手作りのパスデーカードや家族写真なども飾られ、居心地よく過ごせる場となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室ドアは名前を、トイレや風呂など名称をつけている。狭く使いづらい構造の為、利用者が安全に暮らせるよう見守りを大事にしている。		